この映画館に行きたい！

第３回　渋谷ユーロスペースの巻

連載３回目にして「この映画館に行き隊」、とうとうミニシアターの雄「ユーロスペース」に殴り込み！支配人である北條氏のご協力も得て、単独インタビューも特別掲載！

湿度90%（推定）を記録した6月某日。隊員2人を緊急召集した張本人はまんまと遅刻、無意味にべたべたする気候にうんざりしながら、渋谷の街を全力疾走する。歩道橋を越え、さくら通りの坂を駆け上り、ユーロスペース（東武富士ビル2F）に到着。井の頭線渋谷駅より約3分。

外のエントランスには映画のチラシが沢山並べられている。時間があるときは面白そうな映画を探してみるのも良いでしょう。なお、場内に入る前にトイレを借りる。広いとはいえないが、スペースを上手に使ってる感アリ。ちなみに劇場はこの連載で初登場となる2スクリーン！　さて場内は……ほぼ満席！さすがです。隊員Gが席を確保していてくれ、後方の席に無事着。椅子は大きくないと思うが、堅くなく、角度がゆるいので窮屈さ感じず。座席は互い違いに配置。……が、前後の段差が浅いためか、スクリーンが若干低めにあるのか、前に背の高い人や、後ろを気にせず深く腰掛ける人が座るとスクリーンの下部は見えなくなりがち。字幕が下側だと結構厳しいものが……！　混んでいる回は、映画館の醍醐味を噛み締め、前方の席で鑑賞する方がいいかもしれません。鑑賞後は文化村近くのカフェバーで軽く食事。渋谷という土地柄、映画を楽しんだ後に、何でもできるのも魅力のひとつです。

今回観た作品はコレ！

子猫をお願い　2001（韓）112分

監督・脚本：チョン・ジェウン
出演：ペ・ドゥナ、イ・ヨウォン、オク・ジョン
ストーリー：高校時代の仲良し5人組は、今年で20歳。しかし時間とともに、お互いの距離が開き始めて……。

◆主役の女の子可愛すぎです。強烈だったのは室井滋風（？）の双子姉妹でしょうか。ハングル文字と映像がおしゃれに組みあわされていて、センスの良さを感じた映画でした。（ぐるめ）

◆5人の女の子たちがとにかくリアル。女の子特有の友情の雰囲気が丁寧に表現されています。一定の距離を持って彼女たちを描き出している、カメラにも好感がもてました。人に良く見られたがりで、一生懸命で、ちょっと無理もしてて、ほんとは多分すごく強がりな、キャリア指向のヘジュにLOVE！（あり）

◆大学時代、私は女の子4人組で仲がよかった。女同士の友情には、どんなに仲がよくても「こいつにだけは負けたくない」「そりゃ、ちょっとないんじゃないの？」という微妙な空気が存在する。もし4人でこの映画を観たら、私たちは一体どんな話をするのだろう？「主人公、かわいかったよね」程度の話しかできないかもしれない。あるいは、「実はあのとき……」なんて暴露話が出てきて、友情が試されるのかもしれない。ただひとつ言えるのは、私たちは4人の内の誰かが警察に捕まったりしたら、何を差し置いてでも助けに行くということだ。それだけは信頼できる、と思う。……たぶん。とにかく、友情を確認したくなってしまう映画だ。女同士の友情は複雑なのよ。（まい）

ユーロスペース

1982年にミニシアター「ユーロスペース」を渋谷に開館。以後ヨーロッパ、アジア映画を中心に、独自の映画配給・興行とともに、日本映画の製作及び外国映画の共同製作を行い、特異な活動を展開している。

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町24-4　東武富士ビル2F
スクリーン1：75席／スクリーン2：106席
電話　03-3461-0211
URL　http://www.eurospace.co.jp

8月は『子猫をお願い』（2001／韓／112分）『映画番長　エロス番長シリーズ』（2004／日／監修：瀬々敬久）『風音』（2004／日／監督：東陽一）『炎のジプシーブラス～地図にない村から～』（2002／独／98分）など、バラエティにとんだプログラムを予定。

THEATER interview

～未来に向かって僕らの仕事はやんなきゃだから～

ユーロスペース支配人北條誠人氏インタビュー

自主映画を作っていたものの、「モノを作るよりも観せる方が性に合っている」と感じ、ユーロスペースの支配人になりおよそ15年、プログラムを全てご自身で組んでいるという北條氏。その独特で新鮮なプログラムは常に観客の心を離さない。そんなプログラム作りの秘訣は？

北條：上映作品を選ぶっていうのは幸福な気持ちじゃないと出来ません。心が疲れてたり、不幸だったりすると全然決められないし、そのとき決めた番組はあまりよくないです。ですから絶えず気持ちのクオリティを一定にしなきゃならないなと、喜怒哀楽を極力捨てるようになってきますね。

――一見逆のような気がします。映画を観るって結構感受性を使うことだから。

北條：そうそう、まさにそうなんです。矛盾するんですよ。試写で例えば売り込みの作品を拝見して、ポロッと泣いちゃったりしますよね、でもその試写が終わって配給会社の方たちと会って絶対そこでは決めないですね。一週間後くらいに改めて連絡しますからって、いわゆる寝かすってことを自分でやってます。なんでここで泣いたんだろうとか、なんで途中で飽きちゃったんだろうとかということを考えていくんです。

――プロの仕事ですね。

北條：基本的に映画館ってスクリーンがあって、イスがあって、映写機があって、音がでて、暗くなれれば、世界中共通です。問題はそこで何を上映するかになっちゃうんですよね、結局は。僕は、一つは「過去に映画を作られてきた方、いわゆる名匠とか巨匠とか言われる方のジャンル」を、二つ目は「今の作家の、今の映画」を、三つ目に「これから出てくるであろう若い人の作品をレイトショーでいいから」、上映していきたい。そうすれば同じ一つのスクリーンで、過去と今と未来が見えると。昔のものだろうと若い作家だろうと、人を惹きつけるのは「良いもの」なんです。お客さんにはそれを発見してもらいたい。そのための踏み台として劇場はあればいいと思います。

――劇場の今後の展望を。

北條：僕も随分年をとったんだと思いますけど、やっぱり劇場を開かれたものにしなきゃいけないということを考えるようになってきましたね。みなさんからすると信じられないと思いますけどね……。あのー、これからのユーロの課題は子供たちに映画を観せることです。

――えっ（オドロキ）

北條：今年、幼稚園児が40人くらいで映画を観に来てくれたんです。アニメなんですけどね、『テディベアのルドヴィック』っていう。そこで、子供たちが騒いでもいいようにと本興行の前に一時間繰り上げて上映したんです。これはね、比較的自分の中で手ごたえがあったんですよね。僕たちって、配給会社とか代理店の人たちと仕事するので、言葉とかがかなり業界の言葉に汚されているんですね。幼稚園の子どもたちに映画について語るってことは試されました。手ごたえを感じたというのはそういう意味で。未来に向かう仕事をすることによって我々がリフレッシュできるし、新しい問題意識を見つけられるから、それは楽しい。
すごいびっくりしたのは幼稚園の先生が比較的映画を観ていて、ちゃんとわかってる方だったんですね。園児たちに観せる前の日とかに、『ルドヴィック』のパンフやポスターを買って情報や知識を与えて、翌日実際に映画館に行こうというのはプログラムとしてたいしたもんだなぁと思いました。で、どこの国の映画か？とか聞くと「カナダー！」と子どもが言うわけで。単に観せっ放しではない。

――映画館に行くってけっこう子どもにとっては大きいイベントなんですよね。

北條：そういう仕事をこれから出来ればなと思います。